



原爆証言 次代が継ぐ

胎内被爆

体験集発行

原爆投下時に母親のおなかにいた胎内被爆者らが昨年夏に全国連絡会を発足させ、広島市で5日、1周年のシンポジウムを開く。被爆者の高齢化が進む中、呼び掛け人の三村正弘さん(69)は「最も若い被爆者に当たる私たちが体験を継承していく」と決意を語る。来年夏には長崎での開催も目指している。

三村さんの母は原爆投下の翌8月7日、10歳だった兄を連れて広島市の親戚宅へ向かい、爆心地から2キ以内に入った。2カ月後、三村さんが生まれた。

直接被爆した父は1960年に亡くなり、5カ月後には母も亡くなった。母は被爆者健康手帳を申請しておらず、三村さんの胎内被爆を証言できる人はいなかった。医療関係の職に就いて被爆者を支援する会を立ち上げたが、「自分は被爆者じゃない」との思いから体験を語ったりはせず、支える側



母親のおなかの中で被爆した三村正弘さん ー広島市西区

あす広島市でシンポ

に徹してきた。

2年前、兄の入市被爆の証言者が偶然見つかり、兄弟で手帳が交付された。同時に母を原爆死没者名簿に記載できることになり「これから被爆者として生きていく」と覚悟を決めた。

厚生労働省によると、胎内被爆者は今年3月末現在7292人で、被爆者全体の4%に当たる。昨年夏には三村さんらが呼び掛けて「原爆胎内被爆者全国連絡会」を発足。当初20人ほどだった会員は11都県44人に増えた。長崎からの参加はまだないが、来年夏には長崎でのシンポ開催を計画しており、三村さんは「長崎とも手を携えていきたい」と話している。

(古川幸太郎)

5日のシンポに合わせ、胎内被爆者ら18人の手記を収めた体験集も発行する。500円。事務局 090(7375)1211。